

「危機の中に伝えてきたもの」

山口県 かいちょうじ 海潮寺住職 きむらえんしゅう 木村延崇

先日、お隣町の劇場で野村万作・萬齋さんによる狂言の公演がありました。昨今の感染症の影響は、芸能分野においても舞台の中止が相次ぐほど甚大ですが、劇場での対策も万端講じて下さり、公演は予定通り開催されました。

開演前のアナウンスでは、出演は萬齋さんと、お父様である九十歳目の万作さん、さらに成人になってまもないご長男の裕基さん。この親子三世代の揃い踏みはこれまで東京公演でも例がないと紹介されました。

狂言は、物まねや笑いを織り交ぜながら、時代時代の風刺も効かせた喜劇として、室町時代以降、民衆に大いに持て囃されてきました。ところが明治以降の近代化の波により流派によっては衰退、廃絶の憂き目に遇う中、伝統を護りつつ持ちこたえ、今日も古典芸能としての支持を得ています。

一方私ども宗門でも、歴代仏祖伝来の御教えを護り、確実に次世代に伝えることをとても大切にしております。

昨年私は、感染症への警戒を緩めることのできない中、住職就任式である晋山式を勤めさせていただきました。考え得るあらゆる安全対策を講じ、慎重に慎重を重ねての法要には、我が本師は先代住職たる東堂として、小六の長男は我が弟子たる弁事として、山内三世代相揃いました。まるで綱渡りのようにして無事に仏法を相続させることができ、深く喜びをかみしめたところです。

仏道や芸能といった伝統を重んじる世界では、先達はあらゆる危機、困難に直面しながらも、自分たちの命脈を保つことに並々ならぬ心血を注いできたものと思います。翻ってすべての人に伝えられてきたもっとも崇高なもの。それは私たちの中に息づくこの「いのち」に他なりません。

困難の最中にある今の時代だからこそ、このいのちは「無量劫」といわれる途方もなく長い間、数多の危機を乗り越えてきたことに改めて思いを至らせ、慎み深く歩んでまいりたいと念じております。